

---

# 狼少女

絹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狼少女

### 【Nコード】

N8590X

### 【作者名】

絹

### 【あらすじ】

狼と生きる少女。

彼女は人間が嫌いだった。

ある日群れの副リーダーが捕えられる。

それに対する彼女の仕方……

## 白いイト

今日もどこの誰とも知らない人々の悲鳴が…聴こえる？…

町の広場で魔女の火炙りだつて。

まじで。すごいじゃん！ 行かなきゃ！！ほらほら、早く！

次に火の粉が降りかかるのは貴方かもしれないのにね。

あはははははは

\*

町を少し離れると、森があつた。

森には狼が出るから近づいてはいけないよ

大人は子供にそう教える。

そんな危ない森だつた。

けれど、子供は少し大きくなると、そこに斧やら槍やらを持って入つていく。

そんな悲しい森だつた。

でも、元はといえば人間の所為で。

町があつた場所には、元々森があつたわけで。

その面積が狭いうちはまだ良かった。狼も同様、人間を恐れていたから。

ただ、毎日、毎日、少しずつ、少しずつ、木はかられ、畑に変わり、木材のために山は裸になり……動物の住みにくい環境になった。

被害はそれだけでなく。動物もまた数の増えた人間どもに追いやられ数が減った。

狩られたのは主に捕まえやすい小さな動物だったけれども。

狼たちは森でなかなか食料を得ることが出来なくなったわけで、追いかけることを知っていたけれど、生きるため。

仕方なしに人間どもの家畜を狙った。

家畜だけではなかったけれど。

狼はそうして人間どもの恐怖の対象となり、更に追い立てられ、狩られることになった。

狼には憎しみは分らない。

狼にとって、人間どもは嫌悪と恐怖の対象だった。

群れの数も個体の数も減ってゆく。

\*

鬱蒼と茂る森の中。

何頭いるのだろう。十は超しているに違いない。狼の群れがあった。その中に。明らかにイヌ科の動物とは違う、そう人間の姿があった。女の子である。

見た目からは年齢は分からない。でも、きつと若い。

ひよろりとした手足は細く、また長い。そして少量の多い栗色の髪の毛。

なにより彼女を他の人間と区別させたのは小さな顔にそぐわぬ大きな、大きな目だった。

その目は夜の闇の中で薄く光り、他の人間が見たら気味悪がるだろう。

お前、魔女の手先か！  
と。

彼女は他の仲間とは違い、二本足で立っていた。

でもそれを狼たち《仲間》は気にするわけでもなく。

きつと、なれているのだろう。

彼女は自分が狼であることを誇りに思い、また人間であることも自覚していた。

狼だけでありたいと願いながらも、それが叶わぬことも知っていた。侵略、それから虐殺：刻一刻と迫っていることを知っていたから。

彼女は賢明だった。知識は大してなかったけれど、野生児としては相当優れた、天才的ともいえる頭脳をもっていた。

彼女が人間だったのは10歳の時までだった。

覚えているのは、町の事。父親はいなかった。

優しい母親。

大きな鐘の音、それは確か教会。

藁と、薬草の匂い。

「この町の人たちは本当にいい人たちね。」

それが母親の口癖だった。

それから…血の匂い。

冬の寒い日。

川の冷えた水に縛られたまま沈められて、苦しそうに咳き込む母。

恐怖で震えて噛み合わない歯。

面会は叶わなかった。

見るたびに傷の増えてゆく母。

そうして、最後に炎に巻かれて母は消えた。

彼女はそれを涙を流して見つめた。

母親が消えたのは彼女がいい人、と言った町の人々の仕業だった。

それが何を意味するのか、今の彼女は知っている。

沢山の仲間の最期に立ち会ったから。

森へ行きなさい！生きるのです！

母親が最後に叫んだ事。

町には必ず捕えられてしまうだろう。それよりは危険が跋扈する森で

生きる

と。

彼女は歩いた。何日も。何日も。

町の人から逃げるべく。

でも、小さな子供はそう遠くに行かないうちに倒れた。

それで、死んだ。

なんて話だったらよくあることだったろう。

でもそれを助けてくれたのは、危険と恐れられていた狼たちだった。食べられるのかとあきらめた彼女に狼たちは。

動けない彼女を嘗め、冷えた体を温めてくれた。

ああ、なんて暖かいんだろう。

もはや彼女に人間に戻る気はなかった。

ただ、自分を救ってくれた狼たちの事が大切で。

だから、人間の頃に培った言葉を、知識を、狼としての生き方を学ぶ間も、漏らさないよう、零さないよう必死で守っていた。時にはこっそりとにぎやかな街に忍び込んで、こっそり食料を頂戴してくる時には必死で新しい知識を詰め込んだ。

いつか人間に対抗するすべになるだろう。

そう思っていたから。

感謝。その気持ち人間らしいといえば、そうだった。

\*

仲間が捕まった。

やられた。

思わず低いなり声が彼女の口から洩れる。

いきなりだ。

変なおい。獣の体臭、それから血の匂いがしたと思ったら、いきなり背後から人間どもが現れた。

卑怯なやつらめ！

それがやつらの手段だと失念していた私も馬鹿だ。常套手段だというのに！

他の狼は不安げに肩を寄せている。

マズいな

まずい。すぐくまずい。よりによって捕まったのは群れの副リーダーなのだ。

狼の群れにも順位があり、オスの狼が彼女で、副リーダーは一匹のオスだった。

このままだと、順位争いが起きるかもしれない。  
今それはダメだ。

またいつ人間が来るかもわからないのに。

くそっ

そして彼女にとって副リーダーがいなのは不安だった。

彼は彼女にとって特別だった。

すぐく、すぐく大事な相手。

狼ではあるけれども。

\*

日が暮れて。

捕えられた狼は人間によって、虐殺されてしまう。

それも世にも残酷な方法で。

彼女はなんとしても副リーダーを取り戻したかった。

飢えて死にかけていた彼女を群れを制して仲間にしてくれたのは、  
彼。

その彼が殺される。

なんの恩返しもできないまま。

見世物として。

それは嫌だ。

だから

群れを従えて、人間どもの町に忍び込んだ。

静かに、静かに。

物音を立てないよう。

近づけば騒ぐ家畜たちから大きく迂回して。

捕えられた野獣は町の一角の粗末な小屋に入れられる。

立てつけが不十分な小屋はさむさを凌ぐのには十分とは言えない。  
きつと震えているだろう。

今、助ける。

檻は頑丈とはいえ木製。

皆で力任せで衝撃を加えれば、壊せるに違いない。



念のため、斧を手に持つ。

彼女は見張りが何の用かなくなった隙をついて小屋に駆け寄った。中には幾つかの檻。

そのほとんど全てに生き物が入っていて、中には人間が入れられているのもあった。

一瞬、言いようのない感情が彼女の中を流れたが、それを無視して、先に進む。

仲間の狼が小さくクウン、と泣いた。撫でてそれを宥める。

見つけた。

ひととき大きな檻の中、寒さに震え、血に塗れながらも生きていた。

力任せに斧をふるう。

狼達も加勢する。

何回打ち続けたらうか。

そう長い時間ではないだろう。

遂に副リーダーを取り戻した。

彼女は斧を放り捨て、仲間とともに闇の中に消えて行った。

## 薄黄色のイト

副リーダーが戻ってきた。

森の奥深くまで失踪した彼女は方で大きく息を着く。仲間たちも喘いでいる。

殺されなくてよかったー…  
でもすぐに彼女は異変を感じた。

なんか変だ。

そう。血の匂い。

副リーダーには至る所に血がべつとり。

彼の血だけでなく、人間の血もついている。これは戦った時に付いたものだろう。  
それはいい。

彼の体の傷から流れる血の匂い。

狼の、というよりは余程、人間的ではないか？

彼女の鼻は敏感だった。

死ぬような傷ではないだろう。  
でも体の至るところが傷だらけだ。

その傷だらけの体から流れ出る、人間の血の匂い。

なんだ、これは。

彼女の視線に気付いたのか。

副リーダーも彼女の目を見つめる。  
狼が誰かを見つめるのは敵意を持っている相手。  
でも敵意を感じられないその瞳は…

人間？

副リーダーははあ、と大きくため息を着くと

「仕方がない」

喋った。

…喋った？！

## 琥珀色のイト

…喋った…

しかも、何処かたどたどしい彼女の喋りより、余程流暢だった。

狼って喋るんだっけ…

一瞬そんな間抜けな考えが頭に浮かぶ。

…。

「あはは。びっくりしてら」

…また喋った…

目の前にいる狼はふさふさした尻尾をゆっくり左右に動かしている。他の狼たちはこの怪異にあまり気にしていない。

「俺は俺だからね…こいつらにはそれが分かってる。

だから気にしてないのさ。」

なんで考えていることが分かったんだろう。

…ああ、目線の所為か。

「なんで、喋る…?」

「おお、やっと喋った!」

狼はハッハ、と舌を鳴らす。

「喋れるだけじゃないよ」

突然狼の体が大きく変化した。

気持ち悪くて見ているのを、途中で放棄した彼女が視線を戻した時。

「人?!」

目に入ってきたのは体中に浅い傷を負った人間の姿だった。  
何処からかくすねてきたのか、襷褌のようなものを身に纏おうとしている。

「おお、寒い。人間の体はもろいな。」

声はさっきの狼だった。

…悪夢なのだろうか、これは  
そんなことを思った彼女。

「いやあ、前に人間に襲われた時あったろ?今回じゃなくて。  
着終えたのか、狼だった若い男は首を振り振り、問いかけた。

「…うん。」

「その時に俺、大量の人間の血を浴びたんだ。」  
大勢の狼が殺された。

その時、確かに彼は大量の人間にかたき討ちをしていた。

「あれ以来、人間としての知識や、記憶、感情が頭の中で反芻して  
いたんだ。何故かついに人間にまでなれるようになった。しかも好  
きなときにね…しかし、あれだな。体としての人間は脆いけど知識  
はすごく面白い…」

マジですか…というかなんで黙っていた

「君という存在が面白いと改めて自覚したよ」

「わるいけど、つかうたんごをもっと簡単、して。いみ、難しい」

狼にこう乞う人間って。  
どうなんだろう。

こうして、かれは人狼となった理由を説明し始めたのだった。

\*

こうして幾日かが過ぎ。

彼は己のリーダーに自分が持っている知識を分け与えるべく、暇な時間を見つけては勉強をしてくれた。

彼女は嬉しかった。知識が増えるから。

彼女は悲しかった。人間に近づくから。

人型であるほうが楽なのか、狼の姿であることも少なくなった。

初めはまったく信じなかった、いや、信じられなかった彼女だが今ではそんな事もあるのだろう、くらいに思っていた。

「でもそれなら、こんどはあなたがリーダー、なればいい」

「嫌だよ。面倒くさいもん。それに俺は君につかえている方がいい。」

「うう…、そんなこと、いうな。」

てるる彼女に狼はくしゃくしゃ、と頭を撫でた。

「話すのもだいぶ上手になってきたね。」

「狼にいわれたく、ない！」

彼女はうう、と歯を向いた。

「あはは。」

むっとした彼女を見て彼は爽やかな笑顔で笑った。

彼女は狼の事が今までとは違う意味で大切に感じられた。

優しい狼として自分を救ってくれた彼も好き。

だけど人間でいる間の彼の事は、何処か違う感情で好き…

人間は嫌いだけど。彼は人間じゃないから。よく分からないけれど。その感情を言葉で言い表すことが彼女には出来なかったけれど。

\*

数か月後。

狼と少女は町に来ていた。

狼はもちろん人の形をとっている。

町の市場。何かしらの食べ物を買すねようとやってきたのだった。

これならば、人間の仕業とされこそすれ狼が狙われないから。

狙いは勿論、肉。

さあ、今日も頑張らなくちゃ。

そつと狼と視線を合わせる。

獲得した獲物を袋に入れて背中に背負い。

さあ、帰ろうかとした時。

聞きたくもない単語が耳に飛び込んできた。

「魔女だ！　魔女が三日後火炙りになるぞお！」

「またどこかの人間が捕まったか…」

ちつ、と舌打ちする狼。

「人間同士でお互いに狩るなんて、さぞや不味いだろうな」

「馬鹿な人間。だから嫌い。ねえ、早く森に帰ろう？」

少女が狼の袖を引く。

狼が腰を屈めて彼女の顔を覗き込むと、血の気が引いて青ざめた顔がそこにあつた。

「…ああ。俺はあまり人間のそういうところに興味はないからな…  
背負う肉塊をやたら重く感じながら、離れようとしたその時。

「魔女の名前は貴族のエリス・リンドェットだとさ！」  
誰かが話しているのが聞こえた。

\*

森の奥深く。

狼たちが心配そうな顔をして、彼女を覗き込む。

彼女は町から帰ってきて以来、膝を抱えて蹲っていた。

肉もあまり喉を通っていないようだ。

クウン、クウン狼たちが鼻を寄せる。

「大丈夫だよ……」

そっと、彼女は狼の頭を撫でた。

……暖かい。

その夜彼女は毛皮の暖かさを抱きしめながら眠った。

目が覚め、目元をこする。

日は既に高く上り、鳥が高くさえずっていた。

朝か。

すこし動きの鈍い頭を懸命に働かせる。

「やあ。起きたのかい！」

相変わらずな人間の姿で、狼が姿を見せた。

そういえば昨夜はどこへ行っていたのだろう。

狼はいたずらっこのように目をキラキラとさせて

「ねえ、リーダー。相談があるんだ。」

そう言った。



## 瑠璃色のイト

彼女は群れの全ての狼を遠吠えで呼び集めた。

狼たちは何事かと集まってくる。

また、数が減った。

人間どもの所為で。

「で？相談って？」

若干の警戒を込めて、狼に聞く。

「昨日の貴族の事、覚えているかい？」

狼は優しく、そう聞いた。

「ああ、…」

「実は俺が受け継いだ記憶、君についても少しだけ交じっていた。

」

驚きで身を固くする少女。

「昨日の貴族の少女、君の友達だろう？」

確かに。

「…昔はそうだったかもしれない。でも今私はおおかみで…」

彼は優しく肯定した。

「そうだね。狼だ。君がなりたがっている狼は友達を余程の事がない限り捨てないことを知っているだろう？」

「狼には…狼だけ友達がいればいい。」

苦い記憶がよみがえる。

親友だと思っていた少女。

身分の差など幼い身にはあまり関係がなかった。

『魔女の娘なんて友達じゃないわ』

そういつて他の少女とどこかに行ったことを思い出す。

『ねえ、あなたのお母さんは最高ね！ 病で倒れた私にあなたのお母さんの薬がなければそうなっていた事が…』  
前まではそういつていたのに…

「さて、そこで提案！君の友達を助け出そう！」

彼女の言葉を無視して狼は続ける。

「嫌だ！ 仲間が危険になるくらいなら…そんな昔に知り合いだつた程度の人間！」

「でも」

狼は彼女の肩をそつとつかみ、優しく語つた。

「君は俺の事を助けてくれた。」

彼女はなんだかよく分からなくなり、うつむく。噛んだ唇から朱色の液体が滴つた。

「それは、…」

「私は正義の味方じゃない。」

結局出てきたのは良く意味の分からない言葉だつた。

「友達を救うのに正義も糞もあるか…」

少し呆れたように狼が返す。

「ねえ、君には人間の友達が必要なんだ…俺みたいな紛い物じゃなくで。」

「いや！ いらぬ。人間なんて…その子だつて…」

「ねえ、勧善懲悪つて知つてる？」

突然狼が切り出した。

「かんぜん…？なにそれ」

「善きを助け、悪きをくじくつてやつさー！」  
何処か楽しそうな狼。

「で、それが？」

「面白そうじゃないか。勸善懲悪！」

軽いノリでそんな事を云った。

「だから私は正義の味方じゃない。」

「ならば！ 正義の味方に今からなればいいじゃないか！」

突然軽くなつた雰囲気は彼女の何か動き出した。

でも。まだ意地は残っている。

「簡単にいくわけがない。」

「ゲームは。簡単にいかないからこそ、面白い。」

面白いじゃないか。命を賭したゲームだ。負けたら、最悪命が落ち

るけれども、勝つたら、狼の命運すらも開けるかもよ？」

「え？」

「人間を味方につけるんだ。それも社会から迫害を受けている人た

ちを。いっぱいいるんだから。それで大きな群れを作ろう。愚かな

狂つた凶器に走る人間どもが入り込む余地がないくらい大きな、強

い群れを。その第一号が君の友達つてわけ。狼のため、どう？」

狼の為。

そういわれて、それならと少女が動く。

「…分かった。狼のため。ならいい。」

「それだけじゃないよ正義のためでもある。だれが魔女を悪と決め

た？誰が俺ら狼を悪とした？俺らからしてみれば人間の方が大きな

悪だ。この世に絶対悪なんてないんだから。君は正義の狼だ！」

この時彼女はこの狼はなんて人間らしいんだろうと思った。狼なの

に。

「ねえ、狼。」

「なあに？」

「私の名前……」

「そういえば人間には名前があるんだつた。それが？」

「私の名前……それは……ラアナっていうの」

\*

「さあ。作戦道理に。」  
彼女の声に。

策を授けられた狼たちが散っていく。

「悪と呼ばれる正義の味方、参上！」  
狼が楽しそうにつぶやいた。

\*

時がたち。誰も立ち入ることのないような山奥に、狼と悪魔たちの村と呼ばれる村が存在する。  
そんな噂が町に流れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8590x/>

---

狼少女

2011年10月23日21時14分発行